大自然が障害者と地域を元気にする

ー 雪 は地域のタカラモノー

廃業ペンションを活用した障害者移住計画

雄大な大自然に囲まれ、豊富な水資源による川遊びや豪雪地ならではのスキー場など、日本有数の観光地である“みなかみ町。しかし、少子高齢化、人手不足など地域の衰退が止まらないという実情があり、エリア内には複数の廃業したペンションが建ち並んでいます。そこで、このペンションをグループホームとして活用し、障害者を移住させます。

障害者は地域住民の増加のみではなく、地域の労働力としても活躍します。本来、市街地で運営するグループホームですが、住宅地では近隣トラブルも多く、地域交流が難しいという問題もあります。ここでは大自然の中で周囲に気を遣わず伸び伸び生活を楽しむことができるのです。

また、人口増加を望まれているエリアだからこそ、移住する人々を歓迎してくれる。望まれた移住で、地域と自然と共存できる障害利用者は、必要とされることで充実感を覚え、生活の喜びを感じ、地域に貢献することになります。

障害者の方に大自然の中で生活してほしい

きっかけは、あるご家族の相談から始まりました。約 15 年前に障害児をもつご家族より、住宅の設計を依頼されました。それから、お子様の成長と共に年を重ね介護に限界を感じたご両親から、グループホームを探してほしいと相談がありました。その家族が理想とするのは、現住まいで体験できなかった自然環境での生活でした。

障害者総合支援法で設置されているグループホームですが、“障害者が今まで生活してきた近くに住む”ことを前提としているため、そのほとんどが、住宅地に存在します。確かに生活の利便性を考慮すると住宅街は合理的であります。しかし、精神障害者にとっては、自然の中で過ごすことで、精神を安定させ改善に役立つ生活が適切である可能性があります。

そこで、「希望の施設がなければつくろう！」そこからスタートしました。

「ぐるーぷほーむ KNOOP」とは？

施設は、自然豊かな群馬県みなかみ町にある藤原地区と谷川地区の 2 つのエリアで展開されています。

KNOOP 藤原

水源として大切な藤原ダムの奥にあります。
近くにはキャンプ場やスキー場やサッカーグランドなどがあり、四季折々多くの観光客が訪れます。
冬は、大雪により町が数日間孤立したこともある豪雪地帯です。

KNOOP 谷川

雄大な谷川岳を目の前に、建ち並ぶ温泉街です。
温泉旅館はワンランク上の高級温泉旅館が多く、平日でも多くの観光客が訪れております。
周囲は自然豊かで落ち着いた理想的な場所である一方、交通の便が悪く、地域住民が少ないため、働き手の確保に苦労しています。豪雪地帯ではないが、1m を超える積雪もある場所です。

両エリアに共通しているのは、地域の少子高齢化と過疎化です。
地元企業は、営業休止したコロナ禍以降、観光者は増加するも働き手の確保に苦戦しての運営を続けています。

プロジェクト名：ぐるーぷほーむ KNOOP
所在地：群馬県利根郡みなかみ町藤原 3535-1
　　群馬県利根郡みなかみ町谷川 87-1
完成年：令和 4 年 11 月 30 日
事業者・所有者・設計者・企画運営者：（有）HIRO 建築工房　伊藤 昭博

構造物の規模・概要

藤原エリア	A 棟 ー 1 階 RC 造・2 階木造：377 ㎡
	B 棟 ー木造 2 階建て：179 ㎡
谷川エリア	C 棟 ー木造 2 階建て：194 ㎡
	D 棟 ー木造 2 階建て：170 ㎡

POINT 01 ペンションの現状と活用の可能性

80 年代から 90 年代に多く建てられたペンションですが、すでに経営者も高齢化し廃業するところも多くなっています。また、コロナ禍により休業での売り上げ減少に加え、老朽化した建物への対応にに困り、身動きできないケースもあります。ペンションは単独で運営している例もありますが、複数のペンションが近くに集まり、ペンション村を形成しているところも多く、それゆえにペンション廃業は、地域の衰退にもつながります。

現在、多くのグループホームは、一般住宅をそのまま利用しています。法的には成立しますが、複数人の集団生活において適切とは言えません。

しかし、ペンションの平面プランは客室 5 ～ 7 室、そこに食堂と厨房や団らん室、さらには大きな浴室まで設えていることが一般的です。実は、この間取りは集団生活を行うグループホームの理想的平面プランであります。

また、200 ㎡以下であれば用途変更の必要もなく、そのままグループホームとして活用できます。ペンションはもともと別荘地のような非日常を楽しむ立地条件が多く、快適な日常生活を提供できる場となります。その理由から、ペンションのグループホームへ活用は、大きな可能性を持っています。

POINT 02 みなかみ町である理由

障害者の生活に必要なものとして、自立に向けた就労支事業があります。障害の度合いにより様々ですが、将来を見据えて働くことへの学びの場が必要となります。

この町には、そのような場所がたんさんあります。
みなかみ町は、山奥でありながらも四季を通じての観光地であるがゆえに、キャンプ場やスキー場、温泉施設やお土産店など働く場所が多くあります。それらは、周辺地域の人口の減少に加え、季節ごとに仕事量が増減するため安定した労働力確保が困難であり、人手不足という問題を抱えています。

そこで、地域住民となったグループホーム利用者が、就労支援先として労働します。障害者にとって、この求められた労働環境は、やりがいが生まれ、成長やスキルの向上にも繋がります。

POINT 03 財産としての「雪」

関東での有数の積雪地域として知られる「みなかみ町」ですが、特に藤原は豪雪地帯で有名です。毎年積雪に悩まされ、大雪によって数日間も町が孤立し、食料確保ができないという経験もあります。常に雪への対策が必要な環境です。
しかし、雪のお陰で発展した場所でもあります。

利根川の源流域であり「関東の水瓶」と称される豊かな水源。降り積もった雪がじっくりと溶け出し、長い年月をかけて清らかな水へと生まれ変わります。

また、良好な雪質で人気スキー場も多数存在します。積雪があるお陰で、行楽スポットとして多くの人々が訪れ、宿泊業やお土産店など経済効果を生み出します。

雪は、厄介者ではある反面、降らなければ困る村税です。だからこそ、雪との付き合い方がこの地域では重要な生活の要素となります。

POINT 04 雪害と共にある暮らし

雪に慣れている地域といっても一晩で 1m を超える降雪となると、住民の生活は麻痺してしまいます。大がかりな除雪作業が行われ、道路や広い場所は機械除雪が進みます。しかし、家の周辺や通路は人力による作業が中心となります。慣れていても、人力による除雪作業は、とても重労働であり、高齢者にとっては大きな負担となることは言うまでもありません。

そこで、普段から地域住民と交流のある若年層の障害施設利用者は、スコップをもって近所を回り、日頃の感謝の気持ちを込めてお手伝いします。今はまだまだ自分で除雪は大丈夫という方もすでに 80 歳を超えており、数年後には間違いなくご自身では不可能となり、サポートが必要です。障害者の除雪は、まだまだ不慣れですが、周辺住民の方に教えていただきながら学び、経験を重ねることで、技術をあげていきます。数年後には、地域の方に喜んで任せていただける知識を身に付けたいと頑張っています。

グループホームには、最終的に利用者 26 名＋職員の活動が予定されており、全員の一定期間を満たす食材がストックされています。万が一、非常事態で町に食料が届かないなど起きた場合でも、その備蓄を配布して利用できます。それは、地域住民はもちろんスキー場への観光客など帰宅困難者への提供も可能です。

そして、このグループホームの存在が、積雪災害時に地域を救う一つの手段になります。

今後の発展と可能性

みなかみ町と同様に少子高齢化や人手不足、ペンション村の衰退などの問題を抱えた観光地は少なくありません。普遍的ではありませんが、この取り組みが一つのモデルとなり、障害者たちのネットワークが全国へと広がってゆく可能性を持っています。

障害者のみんなと地域住民が共生することで、賑わいの創出へ繋がると期待しています。